「勝負下着」で妻に叱られたこと

土居修

洗濯物を干す・取り込む・畳むという一連の作業を退職してから自発的に担っている。30数年間の教員生活を支えてくれた妻へのささやかな恩返し。こうした報恩謝徳の精神がなければ男の美学に殉じることはできない。

4年前の5月の連休が終わったある夕刻。洗濯物を畳んでいると、妻のブラ&ショーツに思わず手が止まった。繊細なレースに高貴な刺繍がほどこされ、洗練ということばこそが相応しい形態。至高の逸品とはこういうものなのか。思わず、感嘆の声を発した。

ぞんざいに扱うことのできない神々しさに圧倒されそうになったが、腹をくくって握りしめてみた。亡我の境に入っていくような感覚。俺の人生、まだまだ捨てたものじゃないぜとニンマリしていたら、しばらくしてこころの片隅でなにかが弾けた。2年後に還暦を迎える熟女がこのような艶やかな下着を着けていいはずはない。

詩人であり作家である清岡卓行はミロのヴィーナスの両腕の不在について、「だからこそ特殊から普遍への巧まざる跳躍」が可能なのだと述べている。そのことをぼんやりと思い出して、この下着が普遍への「跳躍」であるはずはない、あくまで異質、否、異常なのだと呟いた瞬間、不意にひとつの単語が浮かび上がってきた。そのとき、抑制を働かせるべきであったと今振り返って思う。だが、還暦を過ぎて「知性」「感情」「意志」も弛緩していた。それができなかったのである。

「これって、もしかしたら勝負下着なの？」

「どうしてよ」と台所からの妻の声。

「いやあ、あまりにも素敵だから、そう思ったが」

「なんで私に勝負下着がいるのよ、まったく。ぱかじゃないの」

数えきれないほど叱られてきたが、未だに耐性はない。滑らかな感触にうっとりしながらも、言わなければよかったと緩んだ我が身を責めていると、なぜか意識が混濁していった。

最後の県高校体育大会（県体）を控えたある昼休み、同じクラスの柔道部員と剣道部のふたり、それに卓球部員を加えた5人で弁当を食べていた。全国総体（インターハイ）出場という栄冠に向けてひたむきに歩んできた3年間であったが、それはすでに見果てぬ夢となっている。それでも、県体を集大成の場としてこれまで以上の結果を残したいという熱情は誰ひとりとして失ってはいなかった。

「みんなの勝負下着は、なに」

唐突に、卓球部のHがいった。父親の転勤で高校2年次に愛媛県から転校してきた男である。見るからに秀才然としていたから、出身学校を問うと愛光学園だと胸を張った。どのような経過で私たちの仲間になったのか、今となっては定かではない。だが、それが彼の不幸の始まりであった。筋書きどおりに学習から遠ざかり学力が低下していくHを私たちは揶揄した。「おまえ、ほんとうに愛光におったがかや」というときには、美しい青春とは無縁の残酷さがあった。私たちはその残酷さを楽しんでいたといってよい。それでも彼は私たちから離れようとはしなかった。

「僕はジョックストラップ、緑色の。これを履くと調子いいから、縁起を担ぐよ」

「バカか、おまえは。剣道や柔道はパンツを履かないんだよ」

瞬時に剣道部のKが反応し、験担ぎ（げんかつぎ）して勝てるほど、武道は甘くないんだよと続けた。

「ぶらぶらして、のうが悪いんじゃないの」

わずか一年で土佐弁に熟達した能力の非凡さを認めながらも、坂道をゴロゴロ転がっている男のあわれさに心を痛めたことはない。私たちの青春は苛烈であり、無慈悲でもあった。

「慣れだよ、慣れ。パンツを履くと可動域が制限されるんだ」

わかりやすく説明してやった。その日の私は贖罪の男であったのかもしれない。

Hに勝負下着のご利益があったかどうかも含めて、個々の試合の結果はとうに忘れているが、鮮明に覚えていることがある。柔道部のIは順調に勝ち進み、優勝。夢の大舞台への切符をつかみ取った。私といえば率々決勝で判定負け。振り返えってみれば、上級生が引退した2年次の9月からの7か月間はIと二人だけの柔道部であった。「雑巾ダンス部かよ」という同級生の声によって誇り高い青春の汗と涙が泥にまみれていく日々。いつしかそのおぞましさに無感覚になっていた。

私はIの、Iは私の柔道を知り尽くしていた。実力は拮抗していたといってよい。だが、試合形式で組み合ったときの勝率は私のほうがわずかに高かった。自慢ではない（否、自慢である）が、私はIより強かったのである。

けれども、軽量級を制したのはI。まぎれもなく真の強者であった。思い返せば、試合に臨む私の眼前を太った黒豚がノロノロ歩きまわっていたという記憶。Iにはそれが視えなかったのだろう。ただそれだけのことであったと思う。当時の須崎高校格技場には「黒い豚を視ると負ける」という言い伝えがあったのだから。剣道部もその日、数匹の黒豚に遭遇したにちがいない。

（左上へ）

「いつまで、持っているのよ、いやらしいわねえ、まったく。早く畳みなさいよ」

妻の叱る甲高い声で我に返った。そのとき、鮮やかな赤色に目が釘付けになった。

「どうして、赤色なが？」

やはり、抑制を利かせることはできなかった。

「赤色はね」

叱らない妻。私の左肩にその左手を置いたまま、右側からささやいた。

「魔除けなのよ」

「えっ、魔除けなが」

想定外の答えに軽く応じながらも、端正な顔立ちに隠された奇妙な笑みを見逃さなかった。妻が近づけようとしない魔性とはなんだろうかと考えていたら、悪寒がしてきた。鳥肌も立っていた。だが、今も寝食をともにさせていただいている。杞憂であったにちがいない。

「勝負下着」はバブル期（1986年12月から1991年2月）に社会進出をしようとする女性の決意を具体化したものであるという。すなわち、セクシーさの演出によって、条件の良い三高の男性をゲットするための誘惑の小道具。意味合いは違うが、それより10年ほど前の田舎の高校生が使ったという事実に驚愕するほかはない。転落の一途をたどった高校時代であったが、Hはやはり愛光学園の出身であったと敬意を抱くべきであろう。

私は妻となる女性に「勝負下着」の有無を問うことなく、1987年に結婚している。

「三高でもないあなたに、必要かしら」と冷ややかに返されることが怖くて封印したのである。臆病であったとしても、抑制する勇気と気力があの頃の私には確かにあった。今はそれすらもない。緩みきった日常。だから叱られ続けているのだが、それにしても若い日に夢見た「楽しい老後」はどこにあるのだろう。

（余談　2年次から柔道部の監督は南国市にお住いのM氏。もちろん、高退協の一員である）

夫婦別姓について思うこと　その1

高教組教文部長　古畑邦明

私は「夫婦」別姓だ。夫婦にカッコをつけたのは、別姓であり続けるために結婚届を提出しておらず、法的には夫婦ではないからだ。

なぜ「夫婦」別姓にしたのか。これは先輩の影響である。私は学生時代に青年運動団体に加盟していた。そのとき指導的な立場の人が夫婦別姓だった。また、民青の先輩ふたりが結婚するとき夫婦別姓を選んだ。進歩的で新しい夫婦の形でかっこいいと思った。

高校の臨時教員を4年経験して採用試験に合格し、その翌年、長年付き合っていた今の嫁さんと結婚した。そのとき夫婦「別姓」をお互い選んだ。嫁さんはひとりっ子であり自分の姓を変えたくなかった。私も変えるつもりはなかった。ここで私の実家のお話をすると、4人兄弟の3番目で長野県から高知に出てきた。実家の「古畑」の姓を弟が続けているので「姓を継ぐ」ことにこだわりがなければ、嫁さん姓に変えるのが「世間一般の目」だったかもしれない。でも嫁さんやその家族からお願いされることもなかった。もちろん嫁さんに姓を変えてもらおうなどとも考えなかった。お互いの意思を貫くために結婚届も出さなかった。

「夫婦」別姓の始まりだ。

2年して女の子が誕生し、その後男の子2人を授かった。3人とも嫁の姓である。そのことに対してふだん違和感を持つことはない。しかし、子どもが学校に入学して保護者という立場になると、複雑な思いにかられることはある。学校への提出書類の保護者の記名欄に子どもと異なる姓を記入することに躊躇することが幾たびかあった。特に子どもが中学校受験をするときに「不利になるのではないか」と自分の名前をあえて記入しないこともあった。他にもある。保護者会などで自己紹介するときいつも緊張が走った。「1年○組○○○の父です…」とあえて自分の姓を名乗らないようにした。そこであえて「○○の父の古畑です！」と胸を張って名乗ってもいいのだが、「どうして姓が違うんだろう？」「離婚したお父さんが来たのかな？」などと要らぬ気遣い（？）をさせるのが嫌だったし、姓が違うことをいちいち説明しなければならないのではという強迫観念もあって、気が引けた。そのたびに「早く法律が改正されていればこんな思いをしなくて済むのに…」という思いにかられた。

さて、私自身の思いはさておき、子どもたちはどう思っているだろうか。夫婦別姓に反対する人たちの言い分として「子どもがかわいそう」といったことを例にあげることがある。10代後半に成長した3人の子どもたちにたずねると、生まれてから当たり前だったし家庭では姓を意識することは少ないので、気にも止めないようだ。「うちは新しいタイプの家庭だ。なんか誇らしい！」などと高校生の息子が話してくれたときはうれしかった。（533号につづく）